

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

小説 大熊狸喜

挿絵 かん奈

もしお嬢様が  
大財閥のお嬢様が  
催眠術をかけられ  
催眠術たら If lady is  
hypnotized...



## 登場人物紹介

Characters

せんじょういん しるく  
**千条院 詩流玖**

世界的財閥「千条院財閥」のお嬢様。  
お嬢様としての責任感と、年頃のわ  
がママがほどよく混ざった少女。大  
富豪らしい天然さも持っている。

せんじょういん さてん

### 千条院 紗天

詩流玖の妹。矢緒樹から姉や他の女の  
子を守るような態度を取っている。タッ  
プリーなツインテールが豪華な少女。



いちかわ ゆうり

### 一川 優羽里

矢緒樹の幼なじみで、元気な少女。子  
供の頃から仲がよく、しょっちゅうケ  
ンカもしていて、また矢緒樹のセクハ  
ラ行為の一番の被害者でもある。

おぎき ふ み な  
**尾崎 二三奈**

お屋敷のメイド長で、矢緒樹や優羽里たちの上司にあたる女性。自分にも他人にも厳しいため、メイドさんたちにもちょっと怖がられている。



あじはら この か  
**味原 九香**

お屋敷の若き料理長で、世界有数の天才コック。無口で不思議系。なぜか矢緒樹だけ、食事は冷遇されている(もちろん原因は矢緒樹)。



こがねざわ れいる  
**黄金澤 麗瑠**

詩流玖の親友であり、ライバルで、「千条院財閥」に次ぐ「黄金澤グループ」の娘。おっとりとした喋り方で、裏表のない性格をしている。



ななころび や お き  
**七転 矢緒樹**

本編の主人公で、お屋敷で唯一の執事見習い。年頃の男子らしく、女性の裸やHには興味津々で、更に行動力もある。

プロローグ	スケベ少年とお嬢様	007
第一章	少年の日常と怪しい書物	017
第二章	催眠術とスケベな実験	035
第三章	妹お嬢様と乗馬訓練	057
第四章	メイド長と官能女教師	081
第五章	天才シェフと初めての食感	107
第六章	お誕生日会とエッチなゲーム	132
第七章	幼なじみとミニエプロン	156
第八章	お嬢様と催眠術	178
第九章	集団催眠術とその効果	205
エピローグ	いつもの夜と新しい催眠術？	251



「溜息をつきながら、三体の猛獣相手に愚痴をこぼし、食事を与える矢緒樹。

でかい土佐犬は高級ドッグフードに、巨体の白虎は丸ごとチキンに、そして怪鳥は生の豚肉に、美味しそうにカブリついていた。

「お前たちに言っても、仕方のない事だけだな……はあ……」

麗瑠お嬢様の、真っ赤でプルプルの唇が脳裏をよぎる。キスまで数センチの距離の時なんて、石けんとは違う甘くてよい香りと、ホンノリとした体温まで感じられたのに。

思い出しただけで、下半身がグングンと血を集めてゆく。

「ぐうう……つくづく惜しい。あんな機会、もうないだろうに……ううう……」  
などと、ズボンを膨らませながら涙に濡れる。

と、突然、温かい掌によって、背後から視界を塞がれた。

「だ〜れだ、ですわ〜。うふふ?」

唐突なタッチに驚いたものの、蕩けるような話し方と甘い香りは、間違いない。

「麗瑠様……!」

「当たり前です〜♥ さすが、わたくしのヤオ様ですよ、うふふふ」

少年の答えに、金髪の少女はそのまま背後から、嬉しそうに抱きついてきた。タップリの爆乳が、ぷにゅんり、と官能的な弾力で、肩胛骨いっぱい押しつけられる。

ズボンの中の肉棒は、更に強く、堅く、存在と欲望を主張してゆく。

「ああの、麗瑠様……何かご用でも……！」

と振り向いた途端、矢緒樹の唇にお嬢様の唇が重ねられた。

——ちゅ。

「えっ——あの……！」

「優勝のご褒美、頂きましたわ〜♥」

戸惑う執事見習いに、麗瑠は満面の笑みだ。更によく見ると、少女は真つ赤な革製の首輪を手をしている。

「ヤオ様〜。今度はわたくしに、お誕生日プレゼントをくださいませ〜」

言われて、細いチェーンが輝く首輪を差し出された。大きなリボンの付いた首輪を受け取ると、跪いた金髪の令嬢は目を閉じて、キスを待つようなポーズになる。

（首輪を着けろって事だよな……）

下着一枚の半裸お嬢様に、首輪を着けるといいう、なんか背徳な行為。心臓がドキドキするのは、性的興奮も十分、含まれての事。

「で、では……」

す……と差し出された細い首に、革製の太い首輪を巻く。少し緩めに留めると、首輪に繋がれたお嬢様が完成した。

「麗瑠様……なんかとても、エッチです……」

そんな言葉しか出ないのが、ちょっと悔しい。

金髪の豪華な、お姫様みたいな美顔の少女が、シヨーツ一枚の姿で首輪に繋がれ、ペットたちと同じ場所で跪いている。

令嬢という立場が、女性のみが持つ被虐的な官能美を、更に引き立ててくれた。

「いかがですか？ ヤオ様……♥」

頬を染めて瞳を濡らし、崩し正座で両掌をついて、下から見上げてくる。そんな愛らしい姿に至っては、それだけで男の征服欲を激しく揺さぶってきた。

そして首輪のお嬢様は、満腹で寝転がる土佐犬と白虎をソファに、少年を挑発してくる。気怠そうに、毛皮に裸身を預け、最後の一枚に包まれたお尻を、コチラに向ける。

「ヤオ様……麗瑠はずっと、ヤオ様を想っておりましたの」

麗瑠の想いには気が付いていたけど、あらためて告白されると、結構ドキドキ。

お屋敷で働き始めた頃、矢緒樹は少女と出会った。麗瑠がお屋敷に遊びに来た時、庭園を掃除中だった執事見習いの頭に、ピヨちゃんが留まったのだ。

「あの時、ヤオ様はピヨちゃんを振り払いもせず……わたくし……ああ、この方はとてもお優しい方なのですわと、とても感激いたしましたの」

「ああ、あの時は……」

実は怪鳥に掴まれて、ビックリして動けないだけだったのだけど。それでも今は慣れて

いるし、とにかくお嬢様は好意的に受け取ってくれていたようだ。

「うふふ……ね、ヤオ様からのプレゼントは、首輪だけですか?」

見つめる瞳がトロりと蕩け、滑らかな肌はシットリと汗ばみ、ムツチリと張りのある内腿が上気していた。こんな魅力的なお誘いを受けて、男が断れるワケがない。

「そ、そうですね、まだプレゼントがありました」

突き出されるヒップを軽く撫でると、少女の肌がプルつと揺れる。ショーツの左右に指をかけると、丸いお尻をツルりと剥き出しにした。

「あん、ヤオ様あ……♡」

全てを晒されたお嬢様は、僅かに声を震わせて羞恥している。そして目の前で震える裸尻は、少年の視線と恥ずかしさで、更に上気した。

薄い日焼け色の後孔は、細くて縦長でシワを集め、キュつと閉じられている。会陰は既に、蜜によって濡れていて、甘い女体の芳香を漂わせていた。

裸身と首輪に興奮してか、姫溝は既に開かれていて、濡れた粘膜を視界に晒す。朱い肉芽はピクンと震え、敏感な襞が恥ずかしげにわななく。

尿口と膈孔は、特に視線を感じやすいらしい。視線を向ける度にチュクリと収縮をした。目の前の女粘膜に、堅い勃起は更に熱を上げてゆく。

「濡れていて朱くて、とても綺麗ですね」

「あうん……ヤオ様のお好みでしたら、わたくしはとても幸せですう……♥」

熱を帯びた少年の言葉に、少女の蕩ける瞳が、幸せそうな艶に揺れる。お尻の肌を指先でくすぐりながら、矢緒樹はジッパを下ろして熱棒を空気に晒した。

「や、ヤオ様……ひゃん」

自ら挑発したお嬢様は、意外にも男性器を見るのは恥ずかしいらしい。ジッパの音を聞いた途端、視線を泳がせ耳まで真っ赤にして、毛皮に顔を伏せてしまった。

そんな麗瑠が、とても可愛らしく感じる。

「大丈夫ですよ、麗瑠様……俺に任せて、全身の力を抜いてください」

「はい……」

矢緒樹は震えるお尻を優しく掴むと、先走り液をこぼすペニスを、ツンと押し当てた。

「ひゃんっ——はふう……！」

真っ赤な美顔を正面に向けて、麗瑠は背中をしならせる。濡れた媚孔はとても熱く、まだ鈴割れで触れているだけなのに、キスをするように吸いついてきた。

——ちゅぶ……つぶぶちゅ……。

肉棒を進めると、キツイ処女膜に行き当たる。途端に、破瓜の怖さを感じるらしい少女の、背中からお尻が、プルルつと力んだ。

（緊張しているな……なんとか——そうだ！）

矢緒樹は、お嬢様が持参した首輪のチェーンを掴むと、ちよつと強めにクンクンと引つ張る。案の定、そんな扱いに官能を覚える首輪の令嬢は、それだけで背筋を震わせた。

「あんうっ——わたくし、ヤオ様の、ペット……」

蕩けた言葉がこぼれた瞬間、更に首輪を引きながら、強く腰を突き出す。そして。

——ちぶつ！

「んんうっ——っ！」

キツかった絞りが、一瞬で真綿のような抱擁感に変化。麗瑠の処女が、矢緒樹に捧げられたのだった。綺麗な破瓜の証が、一筋流れる。

「あ……あはう……わたくしを、ヤオ様が……」

痛みの中で、幸せそうな笑みを見せる、金髪のお嬢様。更にペニスを突き込むと、まぶたを細めて「はああ……」と熱い吐息をこぼしていた。

「麗瑠様……とてもキツくて、熱いです」

腰と裸尻が密着すると、粒の多い褌が一齐に締めつけてくる。根本からカリ肉に向かって、絞るように脈動する膣壁。

ヌルヌルに潤う熱肉孔で抱き締められると、男の本能は腰打ちを始める。最初はゆつくりと腰を動かすものの、ペニスは粒々の肉壁に愛撫をされて、すぐに速度を上げた。

——ちぶつぶぶ、ちゅぶぬるる……つぶつぶつるちゅぶつ、つぶづぶぬるちゅぶつ！

「やはっ——ヤオさまあつ……おくまで、おつきなつ、ヤオさまがあん……っ！」

男子の力で肉突きをされて、大きなお尻がタプタプと跳ねる。突き込みを受けるお尻から、軟らかく振動を受ける背中までが、肉感的にくねっていた。

虎の毛皮と土佐犬の皮膚をキュットと掴み、初めての勃起突きに耐えている麗瑠。白いスベスベの肌が、粒の汗を浮かせながらホンノリと上気してゆく。

毛皮のクッションに上体を預けた、変形四つん這い姿勢だからだろう。下向きで量感の増した爆乳と濃い桃色の先端媚突が、毛皮に見え隠れしながらスリスリと擦られている。

勃起を締めつける膣壁は、拙く全体で締めりながら、隙間ない密着を求めて柔軟に吸いついてきた。

「んくっあうんっ……おなが、燃えちゃい、ますう……！」

既に痛みは遠のいているらしく、垂れ目のまぶたは女の性感で蕩け始めている。腰で叩かれるお尻は、自らも官能を探るように、クネり動く。

膣内から男性肉が引かれると、放したくないというように膣壁が締まって、後孔もヒクつく。満たされると優しく包みながら、菊肛もプクンと膨らんだ。

十数回の抽送で、矢緒樹のペニスを覚えたらしい麗瑠の濡れ膣壁。勃起の前後動に合わせて粒褌が密着し、傘の裏側や本体の筋を愛撫した。

熱のヌル粒肉に包まれている快感が、ペニスの肌を走り、腰から背筋の中枢までゾクリ

と灼かれる。勃起の快感に意識を奪われると、力を溜められる腰の抽送が速くなった。

(麗瑠様の、中っ…気持ちいい…っ！)

——っつぷちゆるぷちゆつぷつ、つぶづぷちゆぷちゆつ、くゆぷつゆぷりゆつ！

「っ——っあっはっんくはあぁっ…ずんずんっ…ずんずんっ…ずんずんっ…ずんずんっ…！」

大きな両手で巨尻を掴み、本能に任せて腰を打つ。

四つん這いのまま肢体の力が抜けた少女も、女体の求めるままにお尻をくねらせる。

「粒々でっ、全部が擦られ、ます…っ！」

「ヤオさまヤオさまあぁっ——わた、くひい…蕩け、とけひゃひまふう…！」

少女の言葉が蕩けると同時に、矢緒樹の全身が熱を上げて、周りの音が遠くなる。射精

以外の全てを肉体が拒否し、腰の奥から先端に向かって、力が凝縮してゆく感覚。

麗瑠の肌が朱に染まり、ヒクヒクと痙攣を始める。

亀頭部分の内部で欲求が限界を突破すると、もう射精するしかなかった。

「れいるさまっ——このままっ…！」

キツく閉じた目の中が、眩く輝く。快感の限界ラインを突破する瞬間、一際強く熱勃起を突き込む。

——っつづぷゆちゆつ！！

そして矢緒樹と麗瑠は。

「はあああああああつ——ヤオ、ヤオ、さまあああああああ…つ!!」  
無骨な腰と震える女尻が強くぶつかり、同時に絶頂へと達していた。

裸のお嬢様の背中が反らされて震え、肌がサアつと朱く染まる。汗が粒になって散りながら、ムンとした女体の芳香を放つ。

胸が突き出されると白い爆乳がタップンと跳ねて、朱い媚突からも粒汗が散っていく。そして矢緒樹は、麗瑠の膣内奥深くで、白い粘液を目一杯に放出した。

——つびゅうううつびゆるるどぶゆびゆ——つ、びゅくりゅつどぶびゅりゅりゆるるつ、どくりゅつどくびゆるどくびゅうううつ!!

膣内射精の感覚を一瞬も逃すまいと、男の本能が女の巨尻を手放さない。

「んくん、ああああ…ヤオさまが、わたくしの…なかあ…いつぱい、イッパヒい…  
くらすひい…♥」

膣内での脈動と熱粘液の放出を受ける首輪のお嬢様は、細い背中と白いお尻とを跳ねさせている。

耳もうなじも上気させた、艶やかな麗瑠。遠くでパーティーの音が聞こえる。

誕生日を迎えて一つ大人になった金髪の令嬢は、幸福の涙をこぼす微笑みで、脱力した女体をいつまでも、毛皮の中に埋めていた——。



(えっと……もしかして、優羽里もエッチしたくなつたのかな)

何となくだけども、そんな空気を感じる。イタズラ心も含めて、矢緒樹は幼なじみの朱い乳首に手を伸ばしてみた。

少しだけ驚き、しかし抵抗を見せず、おとなしく媚突をツネられる半裸エプロン少女。

「ん……ヤオちゃん……」

コロコロと転がすと眉根がトロんと下がり、更に頬を染めた官能の艶を浮かべる。乳輪部分を三本の指先で摘み揉みながら、矢緒樹は少女の意志を確信した。

「優羽里、全部俺に任せとけよ」

「う、うん……」

常夜灯に照らされながら、ポニテを揺らして素直に頷く幼なじみが、とても可愛い。

そして、せつかくエッチするならば、少年は少女のエプロンの前ポケットから、使えそうなモノを探り出した。出てきたのは、数個の洗濯ばさみ。

「洗濯ばさみ？ ……なんでこんなモノが」

結構バネが弱くなっている。優羽里は恥ずかしそうに言った。

「それ、明日にでも捨てようと思ってたヤツよ。でも洗濯ばさみなんて、どうするの？」

「ふうん……よし、こうしよう」

質問の答えとして、矢緒樹は少女の右乳首を、洗濯ばさみでキュ、と挟んだ。

「いんっ——何、ヤオちゃん…！」

突然の事に驚いたのは一瞬で、半裸のメイドは乳首を噛む洗濯ばさみを見つめながら、まぶたを溶かし始めている。更に左の先端にも同じ責めを課すと、少女は青いポニテを跳ねさせて背筋を伸ばした。

こうすると、鋭い快感が強く走る事を、矢緒樹はエッチな本で読んだ事がある。

背中を伸ばした事で胸が突き出され、タプンと揺れる豊乳。その先ではプラスチックの責め具が、乳房に振られて跳ね遊ぶ。

「ヤ、ヤオちゃん…：…こんなの…：…んん…：…何か、ヘンなかんじ…！」

洗濯ばさみが跳ねる度に背筋が灼かれるらしく、少女は正座したまま逃れるように、身をくねらせてお尻を揺らしていた。

まるで、いつも使役している日用品に反逆されて責められているみたいで、なかなかエロティックだ。一度射精したペニスに、更に強く血を集める。

「優羽里、テーブルの上に横になれよ」

「え…：…うん…！」

石造りの低いテーブルに、半裸エプロンの幼なじみを横たえる。

横向きで寝転がされた格好だから、双つの豊乳が量感を増して重なりあって、その大きさと柔らかさを見せつけていた。

怯えと期待に濡れる瞳で、優羽里は矢緒樹のペニスをチラと見る。

「お？ 俺のを見たんだから、優羽里のも見せてもらおうぞ」

「えっ——だってヤオちゃんが……あ、あ……！」

足首を掴んで、重ねられていた脚を開かせる。少女は驚きと戸惑いと羞恥とで、目が白黒している。

しかしやはり、脚からは抵抗する力が、ほとんど感じられなかった。性感に肢体を支配されていて、もう自分ではどうする事もできない、といった様子だ。

少年の手で九十度以上に開脚させると、幼なじみは耳まで真っ赤に羞恥する。

「やあん……ヤオちゃん……！」

「おお、優羽里のアソコだ」

初めて見た優羽里の秘処は、とても綺麗だと感じた。

割れ目全体が潤い、上気していて、見ているだけで性器の熱が伝わってくる。

胸奉仕と洗濯ばさみ責めのおかげか、既に蜜に濡れていて、普段は完全に隠れているであろう朱い姫粘膜が覗いていた。

小さな肉芽は既に濡れていて、包皮から頭を見せている。二枚の襞も綺麗に左右へと開き、軟らかそうな粘膜もクチュリとわななく。

小さな尿口が視線を感じてキュッと窄まると、すぐ近くの腔孔も一緒に収縮。更に会陰

を越えたくぼみにある菊肛も、縦長のシワを集めて縮んだ。

「優羽里のココ、綺麗だな」

見ているだけで、股間の肉棒が更にグンッと堅くなる。少年の感想に、幼なじみは羞恥の動揺を隠せないようだ。

「あ、あんまり…はう…見ちゃダメえ…！」

視線と乳首責めが感じるのか、吐息にはハッキリと艶が含まれている。矢緒樹は更に大きく優羽里の脚を開かせると、自らペニスの先を押し当てた。

——っん。

「はひんっ——ヤ、ヤオちゃん…！」

勃起の熱を押しつけられて、少女の背中が一瞬だけしなる。ペニス先端には、膣孔が吸いつくような感覚。しかし少年に向けられた視線は、確かにその先を望んでいた。

「このまま、いくぞ…！」

そう告げると、ユックリと腰を進め、ツプツプと肉を埋めてゆく。

「はあうん…中に、入って…！」

そしてすぐに突き当たる、絞るような処女膜の狭さ。幼なじみも、自身の胎内の抵抗感到に辛さを感じているようだ。

矢緒樹は優羽里の痛みを軽減する為に、バネの弱い洗濯ばさみでクリトリスを挟む。

——パチんっ。

「ひんんっ——ヤっヤオちゃ——」

そして同時に、ペニスを強く突き込んだ。

——っちぶんっ！

「ちゃんんっ——あうふう……！」

刹那だけ全身が強ばり、すぐにクタリと脱力。開脚した腿には一筋の喪失血が流れ、優羽里の初めては矢緒樹に捧げられた。

痛みが和らいだのか、辛そうな表情に少しずつ、恥ずかしげな笑みが含まれてゆく。

「はああ……ヤオちゃん……いいよ、好きにして……」

「ありがとな、優羽里……」

サラサラの青髪を撫でると、少女はもつと嬉しそうな愛顔を見せた。そして腰を進めると、幼なじみは苦しそうな満たされるような、不思議な女の表情になる。

「ああ、はふう……ヤオちゃん、の……まだ、入って……！」

根本まで完全に挿入すると、ポニテのメイドは安堵にも似た吐息を漏らした。もう痛みは消えたのか、官能の混ざった笑顔を見せている。

「じゃあ、少しずつ動かすからな」

汗淫く脚を肩に抱きながら、少しずつ腰を前後させる。最初は数センチで浅く抽送し、







—— つつびゆるるびゆつぶゆびゆるびゆびゆうううううつ、どくるつびゆるつびゆぶりゆりゆつ、ぶゆくつぶゆくつぶゆくつ！

初めての絶頂と膺内射精に、少女の肢体がヒクヒクつと震える。

「ひゃあん…ヤオひゃんの…えっちい…あはう、んっんっ…なかが、すぐく…あつ  
いよう…！」

蕩けた眼差しを向ける幼なじみの表情は、女の快感と一緒に無垢な喜びも魅せていた。ポニテの青い髪を優しく撫でると、嬉しそうに濡れた目を更に細める。撫でる少年の掌に少女の掌が添えられると、手の甲を軽くツネってきた。

「もう…ヤオひゃんてばあ…！」

（…あれ、今までの女の子たちと、反応が違うような…？）

エッチした後、すぐ恥ずかしくたり慌てたりと、みんなそういう感じだった。でも幼なじみは、エッチの時とあまり変化がない。

だけど。

「…可愛いな、優羽里」

そんな言葉が漏れると、幼なじみは更に嬉しそうに瞳を潤ませて、矢緒樹の掌を自分の頬に当てる。なんだか他の女の子とは違う、不思議な暖かさを感じさせる。

その表情には、ドコか催眠術とは違う、暖かくて幸せそうな笑みが溢れていた——。



「やつヤオちゃつ——そんなに、はやくしちやつ……おオナカ燃えちゃう……もへちやぶのにいいい……っ！」

少しだけユックリと、そしてすぐに速い抽送を始めると、胎内の熱が急速に上がる。段の腔壁で肉傘の裏や勃起肌の性感帯が擦られて、ペニスがガマンの力を溜めてゆく。

緊縛ポニテ少女の腰が、肢体が、少年の太い堅肉で腔壁全体を擦り上げられて、切なげにくねる。縄を打たれた肌が薄く上気し、霧を吹いたような汗に覆われてゆく。

腰打ちで揺らされる豊乳は、左右対称に大きな楕円を描く。

初めての時とは違い、午前中だからだろう、両手で羞恥する顔を隠そうとした。なので少年は、自分の肩に少女の脚を残し、優羽里の両掌で背中を抱かせた。

「優羽里のいく顔、ちゃんと見たいな」

「やん……ヤオちゃん……！」

恥ずかしがりながらも、少年の背中に回された掌を放そうとしない、従順な幼なじみ。素直な少女を快感に導こうと、矢緒樹は更に腰の打ち込みを速めた。

——つむづゆふつちゅつづつ、づゆぶづゆちゅつづぶちゅつ、つぶづぶりゅつちゅむゆぶぢゅぶつ！！

「つ——やんやんつ、ヤオちゃふうんつ——そんなにひつ、つよくつつよくひたらわああああああつ……！」

力強い突き込みに、青髪ポニテ少女の腰が脱力してゆく。開脚された脚がフラフラと泳ぎ、しかし震える両手は、必死に少年の背中を抱き締める。

上気する肌はなだらかな曲面に汗を流し、縄に絞られる双乳は大きく揺れて、執事見習いの衣服と擦れあう乳首は更に朱味を増してゆく。

引き締まった下腹部が力なく震え、女性の快感を隠せず素直に見せつけていた。そして腰打つ矢緒樹も、勃起を締めつけられる快感が高められてゆく。

(優羽里の中……壁が、熱い……！)

潤った膈壁は、粒と段が充血をしてペニスを抱き締める。皮膚の薄い箇所がジリジリと擦られて、性感帯は媚弱な電気を受けたような快感を得てゆく。

幼なじみの蕩ける吐息が耳に心地よく、肉突きに耐える官能の羞恥顔と相まって、男の性本能が満たされていった。

(優羽里を、俺がイカせる……！)

あらためてそんな興奮を覚えると、高まる性感で目の前が眩しく感じられる。腰の熱がペニスの先端へと、集約されてゆく。

「ヤオつヤオちゃあんっ——はうんっ、いつちゃっ——わたしひつこのまま、いいつひやふうううううううううっ——っ！」

(——っ!!)

涙と官能の媚顔を見せられた途端、少年の腰中枢が大きく爆ぜる。脳裏が白く弾けて、無意識に引いた腰が、力強く打ち込まれる。

——つづぶつ!!

「んひうっ——つヤオちゃっ——ヤオひゃんんんんんっ……!!」

そして二人は一緒に絶頂。幼なじみの肢体が大きく仰け反り、抱き締める両手も開脚の美脚も、プルルつと痙攣させる。

性感の頂点を彷徨う羞恥顔を逸らす事もできず、優羽里は矢緒樹に縋りついたまま、女体を震わせていた。

そして少年も、幼なじみの胎内へと快感の証を放出。

——つびゅうううううつびゆるるつどぶひゅううううううつ、ぶゆくどくびゅつびゅつびゅううつ、どくぶゆりゆりゆりゆりゆりゆつ!!

勢いの衰えない射精を受けて、緊縛少女のポニテが震える。

「んく、んくん……もつと、ヤオちゃんの、あついの……らひて、いいよう……んふうん……」  
涙の瞳を蕩けさせながら、心の底から嬉しそうな笑顔で、胎内射精を甘受していた。

優羽里とのセックスで、催眠術にかかって処女喪失した女性への対処は、大丈夫な筈。

「あとは……」

一応、万が一にも催眠術の影響を取り除いておく為に、詩流玖とも肌を合わせた方がい

いだろう。少年は主に声をかけた。

「シルクお嬢様も、こちらへ」

「えっ、わ、私は——その……!」

栗色髪の子が戸惑っていると、首輪を着けたままの金髪お嬢様が介入してくる。

「あら、詩流玖がヤオ様を拒否するのですから……うふふ」

少女に挑発の流し目を送ると、メイドたちに命じて、卓上に椅子を用意させる。そして少年を座らせて自身は目の前に跪くと、剥き出しのペニスに乳房を当ててきた。そして

「ヤオ様あ……私のおっぱいで、もつと気持ちよくなってください♡」

軟らかい爆乳で勃起を挟まれると、女壺とは違った、つきたてのお餅みたいな密着感で包まれる。麗瑠が幸せそうな笑顔で乳房奉仕を始めると、お嬢様は慌てた。

「わっ私は、別に拒否などっ——ゆ、優羽里さんっ、いらしてくださいなっ!」

「えっ、わ、わたしですか……!」

シルクが衣装をはだけさせて、更にブラを外すと、タツプんと揺れる双つの巨乳。

呼ばれた緊縛少女も、親友のお嬢様と一緒に、慌てながら卓上へ上がる。そして腰掛けの矢緒樹は、跪く三人の半裸少女たちから乳房奉仕を受けた。

向かって右側には麗瑠、左側には幼なじみ、そして正面には詩流玖。

「わ、私だっ……!」

三人はそれぞれの双乳を寄せあうと、三方向から、タプむちゅつと肉密着してきた。そして頬染めるお嬢様のかげ声で、一斉に上下摩擦を開始する。

「せゝの……んしょんしょん」

——むにゆるたぷりゅ、しゆるむちゅぶにゅふるつ、るぶゆるぶるつ！

柔らかい乳房で、左右からではなく三つの方向から圧迫される。

「こ、この柔らかい感じは……すぐく、いいかも……！」

右側の爆乳はフワフワと包み込むような包容力があり、左側の豊乳はプルっプルの弾力で肌を刺激、そして中央の巨乳はタプタプの密着感で愛撫を捧げてくれていた。

しかも三人での奉仕だから、ペニスの肌に一番刺激をくれるのは、乳輪と乳首。

スベスベの乳肌とサラサラした乳輪、更にコロコロと転がる媚突で、裏側の筋を撫で上げられる。勃起にはゾクンとした性感が走って力が籠もり、先走り液が溢れてしまう。

その上、汗で吸いつくような感触の乳肌と脂肪によって、三方から締めつけ圧迫をされているのだ。膣壁とは違う密着感で、腰の奥に向かってグングンと、射精への欲求が蓄積されてしまう。

（やっぱり、おっぱいとアソコって……ずいぶん違う……！）

しかもどちらも気持ちがいい。目の前の三人も、上気して瞳が蕩っていた。

自分たちの行為に、自分たちが興奮を覚えているようだ。

「んん、はああ……矢緒樹さんの……また、あつくなつて……」

「うふふん……ヤオ様つたらあ……♥」

「ヤオちゃん……わたしも、なんだか……あはう……」

それぞれの言葉にも、シットリと艶を含んでいる。

粒の立った乳輪と硬化した乳首が、ペニスの肌と擦れあう。そんな上下動に少女たちの肩がヒクんと跳ねて、跪いた腰が切なげにくねっていた。

「やおきさん……もつと……んふ、くん……」

少女たちが刺激を求めると、上下動も速くなる。

——つたぷつぷむつすりすりしゅつ、ぷるすりゆすりゆしゅつたぷるつしゅしゅりゆしゅりゆりゆつ！

「んぐぐつ——みんなのおっぱいと、乳首が……！」

奉仕の速度が上がるといふ事は、乳房の密着も強くなる。更なる締めつけと乳首摩擦を受けて、少年の肉棒は、乳肌と乳輪と乳首の圧迫で、三種の摩擦責めに晒されていた。

「こ、これは……初めての感じだ……！」

汗を纏った乳肌での吸いつき締めつけを受けながら、ペニス本体の肌が摩擦される。粒立った乳輪で皮膚の薄い箇所をサラサラと撫でられる。

そして硬化した媚突には、肉傘の裏側や敏感な筋部分に、転がり愛撫を施された。





——ぶちやぺちやびちゅ、ぼたり、ぬりゅ……。

優羽里の綺麗な青色をしたポニーや蕩けた眉や緊縛の紐が、白く濡れる。

「ヤオちゃんのが、顔に……もう、こんなにいっぱい……」

そして詩流玖の豊かな髪に、細い鼻筋に、赤い唇に、タツプリの精粘液が降りかかる。

——つぱちやぼたつ、ぺちやりつちやぶつ、ぬるとろり……。

「ああふ……あつくて……んくん……おいしい……ですわ……」

三人の頬やあごのラインから、それぞれの乳房に精液が粘糸を引く。合わさった乳脂肪に白濁の池ができて、その中心では赤い肉勃起が、三人の主のように未だ硬度を保ち、天を突いていた。

（三人の顔が、俺ので……）

快感から降りてきた矢縮樹が、自ら媚顔を汚した少女たちを眺めていると、三人は舌で精液を舐め取ってくれる。

少女たちのヌル濡れる舌で男性器が拭われると、麗瑠と優羽里はテーブルから降りた。  
「んくん……それでは、私も……」

詩流玖は精液を飲み込むと、椅子に腰掛ける少年に背中を向けて、お尻を預けてきた。スカートを捲ると、下着に包まれた丸い尻が、ガチガチの勃起でムチりと突かれる。  
「シルクお嬢様は、このままがいいんですね」

「えっとその——きゃつ、矢緒樹さん……！」

背後から抱く形になった少女の両足を抱え、放尿するような格好に開脚。そのまま純白のショーツをずらして腿の辺りに残すと、詩流玖は用を足す少女の格好にされた。

親友や周りのメイドたちに、自分の放尿シーンを見せられているに等しい姿。羞恥する半裸お嬢様の濡れ秘唇に、執事見習いは肉棒の先端を当てる。

「こ、こんな格好——んきゃつ……！」

堅くて熱い肉で突かれると、少女の肢体がヒクんと跳ねて、濡れた姫膣はチュッと収縮。腿を持つて開脚させたまま尻を下ろすと、熱い濡れ壺は堅くて長い男性肉に、深く深く貫かれていった。

——つぶちゅ……つぶくぶふ……。

「やつ、はあああんく……そんなに、おくまで……はあ、はうう……！」

息と一緒に、全身の力も抜ける詩流玖。ペニスを根本まで肉詰めすると、少女はクタリと背中を預けるしか、できなくなつた。

深く挿入した媚孔からは、トプトブと新しい恥蜜が溢れている。膣壁は健気にペニスを抱き締め、粒と爇も歓喜して、充血を増していた。

「とても締めつけてきますね、シルク様」

「そ、それはあ……はう、んふう……もう……おねがい、ですから……」

矢緒樹の腰に添えられた掌が、弱々しく握られて抽送を急かす。少しだけ振り向いて見つめる哀願の眼差しを受けて、少年は腰を突き上げた。

——つちゅつつぶちゅつちゅるむつちゅぶちゅつ、つぶちぶつヌルちゅりゅむつ！

「はひっ——あつ、ああんっ……すぐくう、こすれて……！」

少女の肢体を上下させると、その肌はすぐに官能で上気する。双つの剥き出し巨乳もタプタプと大きく揺られて楕円を描き、媚突も更に朱味を強めて硬化。

汗で吸いつく柔らかい肌は、上下動でクネリ、しなる。背筋が反らされると、サラサラの髪が矢緒樹の肩にかかり、石けんのような花のような、よい香りが漂った。

貫かれる膣内は、グンと熱を上げて蜜をこぼし、粒と襷で締めつけ抱擁を繰り返す。

腰を引くと、傘の裏側と本体が襷刺激で擦られる。突き込むとキツイ締めつけで広げられた鈴口や裏筋が、粒摩擦を受けた。

勃起全体がジリジリと甘く痺れ、早く頂点が欲しいと欲求してしまう。

更に少女自身も、屈曲姿勢で敏感なGスポットを、より強く摩擦されていて、その性感は更に強められているようだ。

「ひはうっあああんっ——そこふっ、クリクリひっ……んくっひうあああふっ——だめっ……ラめへつれすふうううううっ……！」

腰を引く度に瞳が濡れて、一突きする度に言葉が蕩け、悦楽で肢体を震わせている。

膺壁の締めつけも吸いつきも強くなり、恥蜜も増えて熱も高くなると、早く絶頂へと導いて欲しいと求めているのがわかる。

(シルク様の反応は……本当に、可愛らしい……!)

容姿も肉体も性反応も、その全てが男性の本能を満足させる少女。

もっと肉棒責めを楽しみたい矢緒樹だけれど、ペニスから腰まで走り続ける甘電で、もうガマンは爆発寸前にまで追い詰められていた。

(俺も早く、中に出したい!)

放尿ポーズのお嬢様を更に抱き寄せ、より開脚させた姿勢で胸に抱き締めて、女体を固定する。そして力任せに腰打ちを与えた。

——つつづぶぢゅぢゅぢゅぶつぬるちゅつぶつ、づぶづゆるぶつちゆるぬりゆるつづゆむちゅつづぶつぷりゅつ!!

腿を抱く両腕で詩流玖を上下させて、合わせるように勃起を打ち込む。

入り口から子宮口を貫かれながら、Gスポットを連打されて、お嬢様の肢体は更なる悦楽でカクカクと震え始めた。

「ひっ、はひひひひひっ——ラうつラメヘラメヘええっ——はうつうはあううっ——わたくひひっ、こわれっ——ヘンになりまふゆううううあああああああああああああ  
あっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中

**悪の秘密結社vs正義のヒーロー**  
イケない戦いの記録!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説：高岡智空 / 挿絵：鈴眼依鐘】



全国書店で  
好評  
発売中

「…藤田君は責任取るべき」  
陸月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪凷】



全国書店で  
好評  
発売中

**生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!**  
海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?

宇宙海賊学園ブラックキャット

【小説：Kypnosus / 挿絵：ごまちゃん】

**既刊LINEUP**

- 仙獣字艶戦姫ノブナガシ ①～③
- 坂田唯らい樹【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエレル

- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりに渡る愚者の夜

- ビルグリムメイドン ①～②
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです
- 殉魔!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-73D20ビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫

検索

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic-alkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!